ピカチュウの大冒険

Shadow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピカチュウの大冒険

【Ｎコード】

Ｎ５９２８Ｙ

【作者名】

Ｓｈａｄｏｗ

【あらすじ】

ピカチュウが幼なじみのフシギダネ　ヒトカゲ　ゼニガメと大冒険をするハチャメチャストーリー

☆ポケブレのあのポケモンからご挨拶

※ここではポケモンブレイブアドベンチャーの事を「ポケブレ」と略します。
ただ決して面倒という訳ではないです

ピカチュウ
「・・・えっ？僕　主人公？」

作者
「違う…違うピカチュウ
つまり別個体」

ピカチュウ
「・・・あのさ
フルミーネといい僕といい何故ピカチュウにこだわる？」

作者
「好きだし　君　主人公的存在じゃん？」

ピカチュウ
「まあそうだけど…
まあちゃんとポケブレも書けよ？」

作者
「わかってますよ」

ピカチュウ
「ちなみに僕はポケブレのピカチュウです

この小説とは別個体です」

作者

「お前　口調ＷＷ」

ピカチュウ

「・・・・・・・」

作者

「どした？」

ピカチュウ

「ビーカーチュウウウウウウウウウウウウウウ！！！！！！！！！！」

バチバチバチバチバチバチ

作者

「・・・・・・・・」

ピカチュウ

「あれ？ダメージを受けてない」

作者

「作者だからね」

ピカチュウ

「それでいいのか？」

作者

「うん　それでは

新小説ピカチュウの大冒険スタート！」

第1話　一致団結！（前書き）

作者
「どうもＳｈａｄｏｗです
今回の小説はまたピカチュウが主人公となりますが、性格は結構違います
皆　挨拶して」

ピカチュウ
「えっと…こんにちは
俺の名前はピカチュウ
特徴はえっと…
なんだろうね？
まあ　でも仲間を思う気持ちなら誰にも負けない気がするなあ…って何言ってんだろうね」

フシギダネ
「僕の名前はフシギダネ
少し足が遅いけど反射神経なら誰にも負けないと思うんだ
自分の言うのもあれなんだけどね」

ヒトカゲ
「俺の名前はヒトカゲ
えっ？俺の特性？
そうだなあ…木登りとかは得意だね
あと皆によく器用と言われるよ
自分では思ってないけどね」

ゼニガメ

「俺の名前ゼニガメだ！
特徴だと？そうだなあ…
この四人の中では
力とあると思うぜ！
まあ頭脳はダメだったりするがな
あんまり気にしてないが」

作者
「皆さん挨拶ありがとう
それでは記念すべき
第1話スタート！」

第1話　一致団結！

俺の名前はピカチュウ

ポケモンだけの世界…
通称ポケモンワールドのフレンドタウンという場所に住んでいる

母
「ピカチュウ！
起きなさい！」

父
「朝ご飯出来てるぞ！」

ピカチュウ
「マジ？やべ、起きないとな」

俺は父と母と住んでいる
ちなみにどちらも種族はピカチュウである

ピカチュウ
「いただきまーす」

ガツガツムシャムシャ
ガツガツムシャムシャ
ガツガツムシャムシャ
ガツガツムシャムシャ
ガツガツムシャムシャ

ピカチュウ
「ぷはぁー美味かった」

母
「そういってもらえれば
つくりがいがあるわ」

ピカチュウ
「うん、あ、そうだ
幼なじみのフシギダネ達と遊んで来ていい？」

母
「いいわよ」

父
「お前達は本当に仲がいいな」

ピカチュウ
「じゃあ　行ってきまーす」

母
「行ってらっしゃい」

フシギダネ達というのは
俺の幼なじみの友達の事だ
フシギダネ　ヒトカゲ　ゼニガメ　この三人とは仲が凄いよくて毎
日遊んでいた

ゼニガメ
「ピカチュウ！

遅い！」

フシギダネ
「僕　待ちくたびれたよ」

ヒトカゲ
「まあいいじゃん
さ　遊ぼうぜ」

皆　既に集まっていたようだ

ピカチュウ
「ゴメン　おくれた
じゃあ何するんだ？」

ゼニガメ
「鬼ごっこでもやるか？」

ピカチュウ
「ああ　いいよ」

そして鬼ごっこをやる事になった

鬼はヒトカゲ

ヒトカゲ
「じゃあ数えるよ」

ゼニガメ
「よし！逃げるぞ！」

ヒトカゲが数えると
同時に俺達は逃げた

そして…

ヒトカゲ
「…0！よし捜すぞ！」

ヒトカゲが数え終わったようだ

というか、この場所は狭い為、捜すと行ってもすぐ見つかるんだが

ヒトカゲ
「どこにいるかな？」

ヒトカゲが色々な場所を捜索中

ヒトカゲが動くと同時に俺達も見つからないように足音をたてずに移動

ヒトカゲ
「見つけた！」

フシギダネ
「わわっ」

フシギダネが見つかったようだ

フシギダネ

「逃げろー」

だがフシギダネは四人の中では1番足が遅い為…

ヒトカゲ
「タッチ！」

フシギダネ
「あーやっぱり捕まっちゃったか…」

そして鬼はフシギダネ

フシギダネ
「・・・・・・」

フシギダネが目を閉じた
実はこのフシギダネ…音に敏感な為　少しの音でも見逃さないのだ

ザッ

フシギダネ
「そこだ！
つるのムチ！」

ゼニガメ
「のわっ！」

フシギダネがつるのムチでゼニガメにタッチした

次の鬼はゼニガメとなった

ゼニガメ
「鬼になっちまったか…
なら！高速スピン！」

ゼニガメが高速スピンを繰り出した
この四人の中で1番速いのはピカチュウだが
高速スピンを使った時のゼニガメの速さはそれを越えるほどだ

ゼニガメ
「オラオラオラオラ！」

ゼニガメが甲羅の中に頭を入れたまま、この場所を暴れ初めた

ドガッ

ゼニガメ
「当たった！」

ゼニガメは誰かに当たった感触があった為
高速スピンを解いた

？？？
「痛えな　オラ！」

ゼニガメ
「え？」

そのポケモンはオコリザルであった
部下のマンキーも三人いた

マンキー
「誰だ　お前、でも、いくら餓鬼でも親分を傷つけた奴は容赦しねえぜ？」

ゼニガメ
「う…うわあ…」

ゼニガメが危ない
そう思った俺達はあいつらの目のつかないとこで
一旦集合してゼニガメ救出作戦を建てる事にした

オコリザル
「行くぞ…気合いパンチ！」

ゼニガメ
「か…からにこもる！」

ゼニガメはとっさにからにこもるを繰り出して身を守った

ボカッ

ドコッ

ゼニガメ
「……ッ…」

殻に篭ったとはいえ
気合いパンチを何発も受けては、ダメージは受ける

ゼニガメ
（皆　助けてくれ…）
？？？
「ゼニガメ！
助けに来たぞ！」
突然どこかで聞いたような声がした
ゼニガメが声をした方向に向くと
ゼニガメ
「ピ…ピカチュウ！」
居たのはピカチュウだった
ピカチュウ
「お前　情けないな
俺達四人の中では１番意地張ってたくせに」
ゼニガメ
「う…うるせえ！
あれ…他の二人は？」
ピカチュウ
「今は話しずらいな
その不良連中を倒さない限りは」
オコリザル
「さっきからブツブツ話しやがって！
貴様は誰だ！」

ピカチュウ
「ピカチュウ…
そのポケモンの友達さ…」

オコリザル
「糞が！おい野郎共！
あの餓鬼をボコボコにすんぞ！」

・・・・・・・・・・・・

返事がない

オコリザル
「おい！野郎…」

そしてオコリザルがマンキー達の方を向くと…

ヒトカゲ
「残念！お前の部下達は俺達が倒した！」

フシギダネ
「はぁはぁ…
僕…疲れたよ…」

ゼニガメ
「ヒトカゲ！それにフシギダネも！」

居たのはヒトカゲとフシギダネだった
そして辺りにはマンキー達が倒れている

ピカチュウ
「さあ、どうする？
お前の部下はもういないぞ？」

オコリザル
「糞が！餓鬼共が調子に乗りやがって！覚えてろ！」

オコリザルは部下を置いてどこかへ行ってしまった

ピカチュウ
「あいつ部下いないと
何もできないんだな」

ゼニガメ
「それよりピカチュウ！
なんか作戦でも建てたのか？」

ピカチュウ
「慌てるなって…
簡単な作戦さ
まず俺が最初に現れて
あいつの気を引く
その間にヒトカゲとフシギダネが裏に回り部下達を倒したのさ」

ゼニガメ
「へー
お前達凄いんだな
あっそうだ」

ピカチュウ
「どうしたんだ？」

ゼニガメ
「皆…助けに来てくれて
ありがとな！」

ヒトカゲ
「俺はピカチュウの指示でやったまでだよ」

フシギダネ
「僕も攻撃するとき緊張したけど、ゼニガメを助けられたのはピカチュウのおかげだよ」

ピカチュウ
「皆　やめろよ　照れるって
まあとりあえずゼニガメ
礼には及ばないって事だな」

ゼニガメ
「本当にありがとな！」

ピカチュウ
「ああ　だって　俺達
友達だもんな！」

そしてその日の夜

母
「ピカチュウ　いつまで起きてるの！寝なさい！」

ピカチュウ
「わかってるよ（やっぱ友達っていいな…）」

そして朝が来た

俺は朝ご飯を食べていた

ガツガツムシャムシャ
ガツガツムシャムシャ
ガツガツムシャムシャ
ガツガツムシャムシャ
ガツガツムシャムシャ

ピカチュウ
「美味かった～」

母
「今日は早起きね」

ピカチュウ
「皆が待ってるからね」

俺は大切な仲間がいる
家族がいる
友達がいる
そして…幸せな生活を送っている

第1話　一致団結！（後書き）

ピカチュウ
「な…なんか…最終回みたいだな…感動したし」

作者
「いやさ　始めは絆をテーマにしようと思った訳よ
多分次の話で冒険にでるかもね」

ピカチュウ
「ふーん」

ヒトカゲ
「ま　ゼニガメが無事でよかったじゃん」

フシギダネ
「それもそうだね」

ゼニガメ
「うう…皆…ありがとう…」

作者
「おやゼニガメ君
男泣きかい？」

ゼニガメ
「うるせえ！
ハイドロポンプぶつけんぞ！」

作者
「ゴメンゴメン
それでは次話もお楽しみに」

第2話　親子対決！（前書き）

作者
「やべえな…
ポケブレだけで精一杯だ」

ゼニガメ
「いや書けよ
じゃないと、ハイドロポンプ　喰らわすぞ！」

作者
「わかった　わかった
少し遅れるかも　しれませんが　なるべく1週間に最低、1話は書く事にします
それでは第2話　スタート！」

第2話　親子対決！

ピカチュウ
「みんな！」

ゼニガメ
「お、今日は早いな！」

フシギダネ
「僕　さっき来たばかりだよ」

ヒトカゲ
「さて　今日は何を…」

ピカチュウ
「いや　そうじゃない」

ヒトカゲ
「な…何だ？」

ピカチュウ
「俺さ…
旅をしたいんだ」

ヒトカゲ
「旅？」

ピカチュウ
「ああ

このポケモンの世界を旅してみたい
もちろん皆で
嫌か？」

ゼニガメ
「面白そうだな
俺はいいぜ！」

フシギダネ
「僕もいいよ」

ヒトカゲ
「俺もいいぜ」

ピカチュウ
「よし　決まりだな
じゃあ出発の準備をしよう」

ヒトカゲ
「ちょっと待った！
お母さん達にはどうするんだ？」

ピカチュウ
「大丈夫だよ
バレないって
遊びの準備って言えば
気付かれないよ」

ヒトカゲ
「なら、いいんだが…」

ゼニガメ
「じゃあ１０：００頃
ここに集合な」

皆
「わかった」

そして皆は家に帰り出発の準備をした…

そして…
ＡＭ１０：００

皆がいつもの集合場所に戻って来た

ピカチュウ
「よし　じゃあ皆
準備はできたな？
それでは出発…」

？？？
「待ちなさい！」

突然、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた

ピカチュウ
「この声は…」

フシギダネ
「もしかして…」

ヒトカゲ
「俺達の…」

ゼニガメ
「親か？」

ピカ母
「コラ、ピカチュウ！
なに黙って行こうとしてんの！」

フシギバナ
「フシギダネ！
お前はまだ早い！」

カメックス
「そうだ！ゼニガメ！
お前もだ！」

リザードン
「ヒトカゲ！
アンタねえ…」

ピカチュウ
「や…やべえ…」

フシギダネ
「ど…どうしよう…」

ヒトカゲ

「俺に聞くな
ゼニガメは？」

ゼニガメ
「馬鹿言うな！
俺がこの状況を切り抜けられる訳ないだろ！」

そう…後ろを向くと
ピカチュウ達の親がいたのだ…

ピカチュウ
「なあ母さん…
行っていいだろ？」

ピカ母
「駄目よ
どうしても行きたいなら
理由を言いなさい！」

ピカチュウ
「俺…皆と一緒に旅がしたい…
ただそれだけだ！」

ヒトカゲ
「ピカチュウ…
そんなんで説得できる保証はあるのか？」

ピカチュウ
「別にないよ
俺は正直に言っただけだ」

カメックス
「でもお前らには、危険すぎる！」

フシギバナ
「そうだ！さあ早く戻れ！」

リザードン
「ヒトカゲも早く戻りなさい！」

ヒトカゲ
「嫌だ！
俺も皆と旅をしたいんだ！」

フシギダネ
「僕も！」

ゼニガメ
「俺もだ！」

フシギバナ・カメックス
「駄目だ！」

リザードン
「駄目よ！」

ヒトカゲ・ゼニガメ
「俺達はもう…」

フシギダネ

「昔の僕達じゃないんだ！」

ピカチュウ
「だから
行かせて！」

ピカ母
「わかったわ…」

ピカチュウ
「母さん
わかってくれたのか？」

ピカ母
「ただそのかわり…」

ピカチュウ
「な…何？」

ピカ母
「私達を倒してから行きなさい！」

ピカチュウ
「え……」

フシギダネ
「え……」

ヒトカゲ
「え……」

ゼニガメ
「え……」

四人
「えええええ！！！」

フシギバナ
「それなら納得だ！」

カメックス
「ああ…
俺達に勝てる実力があれば
旅をしたとしても
安全だからな」

リザードン
「さあ、かかって来なさい！」

ピカチュウ
「皆、どうする？」

フシギダネ
「僕…戦いは好きじゃないよ」

ヒトカゲ
「そんな事、言ってる場合じゃないだろ？」

ゼニガメ
「あっちがやる気なんだから、やるしかないんじゃねえか？」

ピカチュウ
「決まりだな…」

ピカ母
「どうやら、決まったみたいね
でも、このまま戦うと、貴方達が不公平になるから
それぞれの親と戦ってね
ピカチュウは私よ！」

そしてピカチュウ達の親子対決が始まった

ちなみにピカチュウ以外の三人は片親しかいないらしく、両親揃っているのはピカチュウだけらしい

なぜピカチュウの父親がこの場にいないかというと仕事に出かけたからである

そして
まずはゼニガメとカメックスの戦い

ゼニガメ
「行くぜ、父ちゃん！
ハイドロポンプ！」

まず最初にゼニガメが水タイプの大技　ハイドロポンプを放った

カメックス
「弱い！
ハイドロポンプ！」

それに対してカメックスもハイドロポンプを放った

ゼニガメ
「おわっ！」

カメックスの方がパワーがあるようで、ゼニガメはハイドロポンプをもろに喰らってしまった

ゼニガメ
「いって…」

カメックス
「俺はお前が旅をするというなら
容赦はしない！」

ゼニガメ
「なら…高速スピン！」

するとゼニガメは高速スピンを繰り出した
どうやら速く動き回ってスピードで勝負をするらしい

カメックス
「なるほどな…
だが、甘い！
ロケット…」

突然、カメックスが甲羅に頭を引っ込めた

カメックス

「ずつき！」

ゼニガメ
「な…がはっ！」

カメックスのロケットずつきがゼニガメにヒットした

ゼニガメ
「なぜ命中したんだ…」

カメックス
「簡単な事だ…
俺が甲羅に頭を引っ込めてる時に暴れまわってるお前に狙いを定めたんだ」

ゼニガメ
「く…」

カメックス
「これで終わりだ！
ハイドロカノン！」

ゼニガメ
「がはっ……」

カメックスは水タイプの究極技　ハイドロカノンをゼニガメに放った

ゼニガメは気絶した

カメックス

「俺の勝ちだ
ゼニガメ…」

ゼニガメは負けてしまった

次にヒトカゲとリザードンの戦い

ヒトカゲ
「いくぞ、母さん！」

リザードン
「さあ、来なさい！」

ヒトカゲ
「火炎放射！」

まずはヒトカゲがリザードンに向かって、火炎放射を放った

リザードン
「それなら、もっと凄い炎を見せてあげるわ！オーバーヒート！」

ヒトカゲ
「な…なんだって？」

リザードンがオーバーヒートを火炎放射に向かって放った

ヒトカゲ
「うわっ！」

火炎放射が力負けして、ヒトカゲはオーバーヒートを喰らってしま

った

ヒトカゲ
「ま…まだだ！
メタルクロー！」

するとヒトカゲはメタルクローでリザードンに攻撃しようとした
至近戦に持ち込もうとしたのだ

リザードン
「エアスラッシュ！」

ヒトカゲ
「いっ…」

ヒトカゲはエアスラッシュの追加効果で一瞬、怯んでしまった
これをリザードンは見逃さなかった

リザードン
「今よ！
ブラストバーン！」

ヒトカゲ
「うわあああぁぁぁぁぁ……」

ヒトカゲは炎タイプ　究極の技　ブラストバーンを喰らってしまった

ヒトカゲも負けてしまった

そしてフシギダネとフシギバナの戦い

フシギダネ
「行くよ、父さん」

フシギバナ
「こい、フシギダネ！」

フシギダネ
「つるのムチ！」

まずゼニガメはつるのムチで攻撃しようとした

フシギバナ
「そんなものは効かん
葉っぱカッター！」

それをフシギバナは葉っぱカッターで防いだ

フシギダネ
「なら
へドロこうげき！」

次にフシギダネは毒タイプの技　へドロこうげきを繰り出した

フシギバナ
「そんな攻撃が私に通用するか！
へドロばくだん！」

するとフシギバナはそれを超える毒タイプの技　へドロばくだんを
繰り出した

フシギダネ
「うわあ…一体…どうしたら…」

フシギバナ
「残念だが
ここで終わりだ！
ハードプラント！」

フシギダネ
「うわあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ…………………」

フシギダネも負けてしまった

最後にピカチュウとピカチュウの母の対決

ピカチュウ
「皆が負けた…」

ピカ母
「特別ルールよ
この勝負に貴方が勝ったら
旅を許すわ
ただ、もし負けたら…」

ピカチュウ
「わかってる…
じゃあ行くよ…」

ピカ母

「さあ来なさい！」

ピカチュウ
「１０万ボルト！」

まず最初にピカチュウは得意技の１０万ボルトを放った

それに対してピカチュウの母は…

ピカ母
「威力が足らないわ！
雷！」

それを超える威力の技…雷を放った！

ピカチュウ
「ぐっ…」

どうやら、パワーではやはり負けてしまうらしく
ピカチュウは雷を喰らってしまった

ピカ母
「降参するなら今のうちよ」

ピカチュウ
「だ…誰がっ！
俺は皆と一緒に旅をしたいんだ！」

ピカ母
「ピカチュウ…」

一瞬、ピカチュウの母の動きが止まった

ピカチュウ
「今だ！
電光石火！」

これを見逃さず、ピカチュウは電光石火でピカチュウの母に突っ込んでいった

ピカ母
「甘いわね！
ボルテッカー！」

なんとピカチュウの母は電気タイプの究極技　ボルテッカーでピカチュウに対して突っ込んでいった

ガッ！

ピカチュウ
「がはあっ！」

ピカチュウが当たり負けしてしまったようだ

ピカ母
「さあ…これで終わりね」

ピカチュウ
「そんな訳ないだろ！
これからが本当の勝…

ぐっ…」

ピカチュウは限界な用だ

ピカ母
「ピカチュウ…
貴方、どうしても旅に出たいの？」

ピカチュウ
「うん！」

ピカチュウは元気良く答えた

ピカ母
「本当　しょうがないわね…
わかったわよ…
行っていいわ…
ただし…」

ピカチュウ
「何？」

ピカ母
「絶対　帰ってくるのよ」

ピカチュウ
「わかってるよ！
よし！行くぞ、みん…」

フシギダネ

「・・・・・・・」

ヒトカゲ
「・・・・・・・」

ゼニガメ
「・・・・・・・」

ピカチュウ
「あ、そうだった…
気絶してたんだっけ…」

ピカ母
「今日は皆　家にゆっくり泊まって行きなさい」

ピカチュウ
「ありがとう　母さん」

そして、出発の朝…

ピカ母
「ピカチュウ！
忘れ物ない？」

ピカ父
「ピカチュウ　仕事から帰ってから母さんから聞いたが
お前達　旅に出るんだってな？
気をつけろよ！」

ピカチュウ

「わかってる！
それじゃあ　行ってきます！」

ピカ母
「行ってらっしゃい！」

そして、いつもの集合場所

ピカチュウ
「皆　お待たせ！
さあ行こうぜ」

フシギダネ
「うん！」

ヒトカゲ
「ああ！」

ゼニガメ
「わかったぜ！」

ピカチュウ
「出発！」

そして僕達は旅立つのであった…

第2話　親子対決！（後書き）

ピカチュウ
「ついに、旅立つのか…」

ヒトカゲ
「そうだな…」

ちなみに
この二人は結構な仲良しな設定

さらに
続編がでるかは解らないが今回の「ピカチュウの大冒険」ではカントー地方のポケモンしか出現しない設定

さらにさらに…

ピカチュウ
「もう　いいでしょ！」

ビリビリビリ！！！！

作者
「あっ！それ大事な奴なのに！」

ピカチュウ
「えっ！
そうだったのか？」

作者
「君の恥ずかしい写真が…」

ピカチュウ
「ちょい　待てや！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5928y/

ピカチュウの大冒険

2011年11月21日22時47分発行